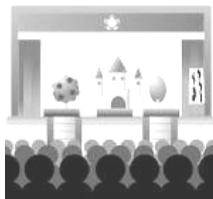


『学年劇の楽しいひみつ』



私が担任として関わらせていただいた17期生にも、卒業のときが近づきました。この号が出る2月22日には「卒業生を送る会」がありますが、17期生のみなさんを前にさまざまな記憶をたぐっていると、まだ終わってひと月もたたない文化祭の学年劇の光景が、まだ新しい印象のままに思い起こされます。

今年度も含めて、私は何度か、学年劇の演技責任者という役割をさせていただく機会を得ました。この演技責任者という役割を繰り返し志願してきた理由はいくつかあるのですが、その中で一番を選ぶとしたら、やはり何と言っても、生徒のみなさんと過ごす時間の楽しさ、以外にありません。

しかし、その楽しさがいったい、どんなふうにして、どこからやってくるものなのだろう、と、ことさら考えることもなく、今日まで来ました。学年劇の思い出も新鮮な今、ここで改めて振り返ってみるのも面白そうです。あくまで私個人の体験の中で、私なりにではありますが、その楽しさのひみつを、ふんわり追いかけてみたいと思います。



「あれだけ長いセリフを、よく覚えましてね。」

劇を見ていただいた方からいただく感想の中で多いのが、この言葉です。これは、その長いセリフを言わせている張本人である私自身が、毎回、役者である生徒のみなさんに対して、敬意とともに感じる思いでもあります。

私の台本は、多いときで2万字以上、平均して1万8千字前後にはなるでしょうか。400字詰め原稿用紙に文字をびっしり埋めつくして、50枚前後になる計算です。これをただ読めと言われたら、誰しも気おくれするものだと思います。

それを読み切って、その上で自分のセリフを覚える、という作業を、それでは、生徒のみなさんは、イヤイヤやっているのでしょうか。

もちろん、覚えるのには並々ならぬ苦労をとまなうものですが、それがただの苦しみなら、なおのこと頭に入るわけがない、と考える方が自然です。すなわち、そこには、長いセリフを覚える喜び、言い換えれば、困難な課題にチャレンジして克服する喜びがあるのでしょう。取り組む生徒のみなさん自身が、あんな事、できるわけがない、と思えるような事について、それができるようになる、その喜びを感じていればこそその長セリフです。長いセリフを言っている事そのものが、喜びに裏打ちされているのだ、と解釈していただけたら、その役者さんも本望だと思います。



私が台本を配るときには、かならず私自身が、声色を変え、すべての役を演じ分けながら、劇のテーマに思いをこめつつ、読み切る時間を取ります。いわゆる一人芝居をさせてもらうのですが、このときにつくづく、良かったなあと思うのが、演者イコール作者であることです。劇のストーリーから、こまかいセリフ回しの一つ一つにいたるまで、どんな意図で書かれ、どのように読めばいいかが分かっていますから、解釈にとまどいがなく、思い切り演じ切ることができます。

ここで重要なのは、あんなふうに自分も演じてみたい、と思ってもらえるくらい、役を楽しんでいるかどうか、です。つまり、あの長いセリフを覚えなければならないのか、という（大切な）点を忘れてしまうほど、演技って楽しそうだなあ、自分もやってみたいなあ、と感じ入ってもらえるか、にかかっているのです。私自身は、この台本の読み切りまでで、演技責任者としての仕事が80～90%終わっている、と思っています。

そんなふうに、台本と、演じることそのものに興味を持ってもらえたら、あとはアドバイスあるのみ、走り出さんばかりに高まるエネルギーには、方向をしめすだけで十分です。セリフ回しには押さえるべきポイントがあって、どの語を



強く言うかで聞き取りやすさが変わる、とか、どの文字を高く言うかで伝わる感情に違いが出る、など、シンプルなアドバイスだけで、役者のみなさんは、文字通り劇的に演技力を向上させていきます。

いつのことだったか、そんな生徒のみなさんの取り組みを見て、「あれは模倣、すなわち再現をしているに過ぎず、いくら劇でスムーズに話せても、生活場面で応用して会話できる訳ではないので、劇によってコミュニケーション力が向上した、と勘違いしてはいけませんよ」と、おっしゃる方々もいらっしゃいました。

それでも、繰り返し、ストーリーの内容やセリフの一つ一つの意味について解説を受けたり、セリフ回しの違いが、与える印象を大きく変えることについて学んだり、本番で、客席の反応に応じてセリフの間を変えることができるようになったり、さらには、生徒間でのイメージが変わって一目置かれるようになったりすることは、どれも間違いなく、コミュニケーション力の向上につながっていると思うのです。

そして、セリフがなかったり、少なかったりする生徒のみなさんも同じで、劇を全体で作り上げる魅力に引きこまれ、自分の役割への喜びを感じるようになれば、おのずとお互いにコミュニケーションをはかりつつ、大道具をはこび、幕を開け閉めし、照明を点け消しするようになります。もちろん、そこにアドバイスは必要ですが、これらの仕事については、集団の成熟につれ、あらかじめの役割分担さえ不要になっていきます。



台本作りを楽しみ、それを生徒のみなさんに伝えるときに楽しみ、個々の成長と集団の充実を見て楽しむ、ということで、楽しんではばかりのようですが、私が学年劇を通じ、生徒の皆さんの姿から教わったことは、「今の自分には少し難しいと思えるような、ステップアップできる課題」に、『『楽しみながらチャレンジする』こと』が、単なる楽しみを超えた『『喜び』へと、いざなってくれる』ということです。

私もステップアップできたか…は、さておき、こんな幸せな時間を何度も過ごさせていただいたことは、大いなる喜びです。生徒のみなさんに、心から感謝しています。

（学年支援部 野村）